

## 問題

次の文章は、「北の方」が、継子である女君を、強引に老医師「典薬」と結婚させようとしている場面である。これを読み、あとの問に答えよ。(30点)

1 典薬、渡れば、(北の方が)「こちいませ」と呼び給へば、ふと寄りたり。「ここに、胸病み給ふめり。かいさぐり、葉なども a 参らせ b 給へ」とて、やがて預けて立ちぬれば、「医師なり。1 御病もふとやめ奉りてむ。今宵よりは一向にあひ頼み給へ」とて、胸かいさぐりて手触るれば、女君おどろおどろしう泣き惑へど、言ひ制すべき人もなし。わびしきままに、思ひて泣く泣く、「いと頼もしきことなれど、ただ今さらに物なむおほえぬ」といらふれば、「さや。などてか c おほすらむ。今は御代りに翁こそ病まめ」とて、抱へてをり。北の方は、典薬あり、と思ひ頼みて、例のやうに錠などもさし固めで寝にけり。

\* あこぎ、2 典薬や入りぬらむ、と惑ひきて見るに、遣戸、細目にあきたり。引きあけて入りたれば、典薬かがまりをり。入りにけり、と心地もなくして「**問三** 今日御 \* 忌日」と申しつるものを、心憂くも入り給ひにけるかな」と言へば、「何か。近々しくもあらばこそあらめ、**問三** 御胸まじなへ」と \* 上の預け奉り給ひつなり」とて、まだ装束も解かでをり。女君

10 はいといったう悩み給ふに添へて、泣き給ふこと限りなし。**問四** あこぎ、かかるはいかなるべきにかと思ひて、心細く悲し。「御 \* 焼石あて d させ給はむとや」と聞こゆれば、「よかなり」と e のたまへば、あこぎ、典薬に「3 ぬしをこそ今は頼み聞こえめ。御焼石求めて奉り給へ。皆人も寝静まりて、あこぎが言はむに、よも取らせじ。これにてこそ **問四・問五** 4 志ありなし、見えはじめ給はめ」と言へば、典薬うち笑ひて、「さななり。残りの齡少なくとも、5 一筋に頼み給はば、仕うまつらむ。岩山をもと思へば、まして焼石はいとやすし。思ひにさし焼きてむ」と言へば、「同じくはとく」と責められてぞ、辞げける

**問三**  
人物の行動や発言を  
押さえる

**問四**  
前後の展開も踏まえ  
人物の行動や発言か  
ら心情を押さえる

**問四・問五**  
前後の展開も踏まえ  
る

15 むやは。入りたちたるやうなれば、いとやすし。志、情けを見えむとて、石求めむとて立ちぬ。

〔落窪物語〕より

**注**

\*あこぎ＝女君に仕える侍女。 \*忌日＝いろいろなことを慎まねばならない日。 \*上＝北の方。 \*焼石＝焼

いた石を綿や布で包んで懐に入れ、身体を温めるもの。

**問一**

傍線 a～e の敬語について、(i) 誰の、(ii) 誰に対する敬意か、それぞれ次の中から一つずつ選び、記号を記せ  
(同じ記号を何度用いてもよい)。(10点)

ア北の方      イ女君      ウあこぎ      工典薬      才作者      力読み手

**問二**

傍線 1・5 を口語訳せよ。(8点)

**問三**

傍線 2 について、次の (i) (ii) に答えよ。

(i) 傍線 2 の事態を受けて「あこぎ」はどのような対応をしたか。最適なものを次の中から選び、記号を記せ。

(3点)

アやむを得ないので、そのまま帰ってしまった。      イ女君を助けてもらうため、人を呼びに行った。

ウ典薬の行為に対し、非難の気持ちを表した。      工典薬に出ていってもらうため、大声を上げた。

オ大泣きして、典薬を困らせようとした。

(ii) 「典薬」は、(i) のような「あこぎ」の対応に対し、どのような行動に出たか。最適なものを次の中から選び、

記号を記せ。(3点)

**問一**  
文脈から語の意味・用法を識別する

**問二**  
助詞・助動詞・敬語  
といった細部にも注  
意する

ア 自分の立場を主張して、そのままいつづけた。  
 ウ 老人であることを理由に同情を買おうとした。  
 オ 何を言われても無視していた。

イ 北の方を呼んで、来てもらおうとした。  
 エ すぐに部屋から出て行ってしまった。

## 問四

傍線3のように「あこぎ」が言ったのは何のためか。最適なものを次の中から選び、記号を記せ。

(3点)

ア 典薬に対する自分の慕情を知ってもらうため。

イ 典薬に自分の非力さを理解してもらうため。

ウ 典薬になんとか女君の立場をわかってもらうため。

エ 典薬をだまして、部屋から出そうとしたため。

オ 典薬が焼石について詳しい知識を持っていたため。

## 問五

傍線4「志」とは、ここでは具体的に何を指すか、簡潔に記せ。

(3点)

## 出典

『落窪物語』

卷之二

『落窪物語』は、いわゆる継子いじめの物語。継母にいじめられた女君が、男君（道頼）に救出されて幸せになり、男君が継母に復讐をするという内容。成立は十世紀末ころと考えられている。作者は学識ある男性と思われるが、未詳。

## 解答

問一 a (i) ア (ii) イ b (i) ア (ii) エ

c (i) エ (ii) イ d (i) ウ (ii) イ

e (i) オ (ii) イ

## 解説

## 今回の文章の概要

女君を救う侍女の機転

・北の方は、老医師「典薬」を呼び寄せ、継子の女君と二人きりにし

問二 1 ご病気もさつと治して差し上げてしましましょう

5 もしひたすら頼りにしてくださいならば、きつといたしま

しょう

問三 (i) ウ (ii) ア

問四 エ

問五 典薬の、女君に対する愛情（誠意）。

て立ち去った

・女君を心配して侍女の「あこぎ」がやって来る（↓問三）

あこぎ：忌日と伝えていたのに部屋へ入った典薬を非難する

典薬：北の方から頼まれていると主張し、その場に居座る

←

・あこぎは女君に焼石を当てることを提案し、典薬に調達を頼む

あこぎ「あなたが頼りです。この行動によって、あなたの女君への

愛情もうかがえるでしょう」（↓問四・問五）

←

・女君への愛情を示そうと、典薬は焼石を求めて立ち去る（⇐あこぎ

の計略の成功）（↓問五）

☑ 文脈から語の意味・用法を識別できたか

問一 登場人物の人間関係を知る上でも、敬語の理解は必須である。

きちんと用法を身につけてほしい。

まず敬語の種類を確認する。

① 尊敬語 ⇐ (地の文) 書き手から、動作をする人に対する敬意。

(会話文) 話し手から、動作をする人に対する敬意。

② 謙譲語 ⇐ (地の文) 書き手から、動作の受け手に対する敬意。

(会話文) 話し手から、動作の受け手に対する敬意。

③ 丁寧語 ⇐ (地の文) 書き手から、読み手に対する敬意。

(会話文) 話し手から、聞き手に対する敬意。

次に、敬語を判断するヒントとなる品詞を確認する。

(1) 動詞 ⇐ ある動作を表す動詞に敬意が含まれているもの。

(2) 補助動詞 ⇐ 主に動詞に付いて、敬意を添えるもの。

(3) 助動詞 ⇐ 尊敬の「る・らる・す・さす・しむ」。

(4) 名詞 (例) 君・帝・上

(5) 接頭語・接尾語 (例) おほん時・関白殿

a 「参らせ(参らす)」は、動詞「与ふ」の謙譲語(②(1))で、(差し上げる)の意。会話文中にあるので、話し手である北の方の、(薬を差し上げるといふ)動作の受け手である女君に対する敬意を表している。ここはあえていじめている対象である女君に敬語を用いることで、嫌味の意が込められている。

b 「給ふ」には尊敬と謙譲、二つの意味があるので注意。ここの「給へ」は文脈から命令形であり、尊敬の補助動詞(四段活用)とわかる(①(2))。へ……なさる」という意を添える。会話文中にあり、話し手である北の方の、(女君に薬を差し上げるといふ)動作をする典薬に対する敬意を表している。なお、a b合わせた(謙譲語+尊敬語)という形で二方面に敬意を表す用法は、よく見られる。

c 「おぼす」は、「おもほす」「おぼしめす」と同様、動詞「思ふ」の尊敬語(①(1))。自らを「翁」とへりくだっていることから、この話し手が典薬であることを押さえる。これは典薬の、「おぼす」といふ動作をする女君に対する敬意である。なお、「思ふ」の謙譲語は「存ず」。

d 「させ(さす)」は、尊敬の助動詞(①)(3)。「す/さす」+「給ふ(＝尊敬の補助動詞)」の「せ給ふ/させ給ふ」の形で二重尊敬(最高敬語)となり、特に高い敬意を表す。話し手であるあこぎが、女君に(御焼石を)お当てになりませんか」と言っているのである。

e 「のたまへ(のたまふ)」は、動詞「言ふ」の尊敬語(①)(1)。あこぎが女君に焼石を当てたらどうかと勧めたのに対し、女君が「よかなり」と言ったのである。地の文にあるので、作者の、動作主である女君に対する敬意を表す。

☑ 助詞・助動詞・敬語といった細部にも注意できたか

問二 1・5とも、敬語や助動詞・助詞の訳出に注意する。

1 「御病」の「御」は尊敬の接頭語で、(女君の)病気の意。「ふ」とは、(さつと・すばやく)の意の副詞。この「やめ(止む)」は、ここでは(病気を)治すの意が適切。「奉り」は謙讓の補助動詞で、(……して差し上げる……し申し上げる)の意を添える。「御」も「奉り」も、話し手である典葉の、女君に対する敬意を表している。「てむ」は、完了の助動詞「つ」の未然形に、推量の助動詞「む」(ここでは(意志)の意)が付いたもの。「つ」は、後に「む」「べし」などの助動詞を伴う場合は、強意となる。

5 「一筋」には(一本・一族)の意を表す名詞と、(ひたすら・一途だ)の意を表す「一筋なり」という形容動詞の用法がある。ここは後者。「頼み(頼む)」は、ここでは現代語と同じく(頼りにする)の意。「給は」は尊敬の補助動詞(四段活用)。接続助詞「ば」は、(未然形+ば)だと仮定条件(＝もし……ならば)、(已然形+ば)だと確

定条件(＝……なので、……と)となるが、「給はば」は(未然形+ば)なので、(もし(女君が私を)頼りにしてくださるならば)と、仮定条件でとる。「仕うまつら(仕うまつる)」は、自動詞の場合は「仕ふ」の謙讓語、他動詞の場合は「す」「行ふ」などの謙讓語となる。ここは典葉が女君のためにする、という文脈なので、他動詞。(いたします)などと訳せばよい。末尾の「む」は意志の助動詞。

☑ 人物の行動や発言を押さえられたか

問三 あこぎ、典葉それぞれの言動を押さえることがポイント。

(i) 侍女のあこぎが、典葉が女君の部屋に入ったのだろうか?と  
思っ女君の部屋に来た場面。そこからあこぎは、「今日は御忌日」  
……」と典葉を非難している。「忌日」は、陰陽道の考え方や「血の  
忌み(月経)」、命日などに沿って慎むべき日。こういう日には面会を  
避けるのが当時の習慣であった。「申しつる」とあるように、このこ  
とはすでに典葉にも伝えていた。あこぎは、それにも関わらず入っ  
きた、と典葉を責めているのである。よって、正解はウ。

(ii) これに対し典葉は、北の方から女君の胸の病気を治すよう言  
われたと自分の立場を主張した(＝「何か……『御胸まじなへ』と  
上の預け奉り給ひつなり)。そして結局はその場にいつづけたのであ  
る(＝「装束も解かでをり)。よって、正解はア。なお典葉の言葉の  
冒頭に「何か」とあるが、これは(はいはいや・どうして)の意で、相  
手の言葉に反対するときに使う感動詞。

- ☑ 前後の展開も踏まえられたか  
 ☑ 人物の行動や発言から心情を押さえられたか

問四 前後の展開も踏まえて心情を解釈し、発言に込められた意図を押さえる。傍線部は、女君の身体を温めるための焼石の調達をあこぎが典薬に頼んでいるせりふである。「頼み聞こえめ」の「聞こゆ」は謙讓の補助動詞、「め」は推量の助動詞「む」の已然形で、意志の意。全体で、「頼りにし申し上げましょう」の意。「奉り給へ」は、「謙讓語＋尊敬語」の用法。「御焼石……給へ」で、「御焼石を探し、姫君に差し上げなさいませ」ということ。その後、他の人は寝静まり、自分の言うことは聞いてくれないために、典薬に頼むのだ、とある。こだけ見るとイを選びそうになるが、これはあこぎの本意ではない。典薬の来訪を心配して様子を見に来た彼女は、事態を確認し、(問三で見たように)典薬の訪問を非難している。ここから、あこぎが典薬に対してよい感情を持っていないことがうかがえよう。また、泣いている女君の前に「かかるはいかなるべきにか(〓これではどうなることであろうか)」と「心細く悲し」んでいることから、典薬を拒絶する女君の心情を察し、とにもかくにもまずはこの状況から助け出したと思っていることを押さえない。そのあこぎの依頼によって、結局典薬は女君の部屋から出て行ったのである。この前後の文脈を踏まえると、傍線部のせりふは、女君の側から典薬を遠ざけようとする、あこぎの計略と考えるのが適切。よって、正解は工。

- ☑ 前後の展開も踏まえられたか

問五 「志」には①意向、意志、②愛情、③誠意といった意味があるが、設問条件に「具体的に」とあることから、ここまでの展開を踏まえて②・③の意味で解釈したい。

問四と同様、傍線部は、あこぎが焼石の調達を典薬に頼んでいるせりふにある。

・志ありなし、見えはじめ給はめ

(〓志のありなしが、見えはじめなさるでしょう)

これから調達しようとしている焼石は、女君が当てるためのもの。つまりあこぎは典薬に、「女君への志を見せてください」と言っているのである。この要請を受けた典薬が「志、情けを見えむとて(〓志を見せようと思つて)」石の調達のため部屋を立ち去った点を押さえる。そもそも典薬と女君の結婚は「北の方」によって強引に計画されたものではあるが、典薬の方は親しげにふるまうなど、まんざらでもない様子がうかがえる。だから女君に対して「愛情・誠実さ」を示そうとして、問四で見たあこぎの計略にうまく引っかけたのである。

### 全訳

典薬が来たので、(北の方が)「こちらにいらっしやい」とお呼びになると、すつと寄ってきた。「ここに(いる人が)、胸を病んでおられるようです。(胸を)診察して、薬などを差し上げなさいませ」と、

そのまま（女君を典薬に）預けて立ち去ったので、「（私は）医者である。1 **病気もさっと治して差し上げてしましましょう**。今晚からは、ひたすら（私を）頼りになさいませ」と、（女君の）胸を探り、手で触れるので、女君はたいそうひどく泣き騒いだけれど、（典薬を）制止しようとする人もいない。つらい気持ちのままに、（女君は）思いついて泣きながら、「まことに頼もしいことだが、ただもう今は何も考えられない」と答えると、「そうですか。どうしてそのようにお思いなのだろう。今はあなたの代わりにこの年寄り（＝私）が病気になるたいものです」と言って、（姫君を）抱きかかえている。北の方は、典薬がいる、と思い信頼して、いつものように鍵もかけないで寝てしまった。

あこぎは、2 **典薬が入った**のだろうか、と心配して来て見ると、遣戸が細く開いている。（戸を）開けて入ると、典薬がかがまっている。（典薬が）入ってしまった、と気が気でなく、（典薬に）『「今日は物忌みの日」と申し上げていたのに、いやなことにお入りになったのですね」と言うと、「いやいや。なれなれしくしたならばともかく、『御胸を診断せよ』と北の方が（女君を私に）預け申し上げなされたのだ』と、まだ着物も解かず座っている。女君はたいそうひどく苦しんでおられるのに加え、お泣きになることも限らない。あこぎは、これではどうなることであろうかと思うと、心細く悲しい。（あこぎは女君に）「御焼石をお当てになりませんか」と申し上げると、「それがいいわ」と（女君が）おっしゃったので、あこぎは典薬に「3 **あなた様を今は頼りにし申し上げます**。御焼石を探し、（女君に）差し上げなさいませ。（他の）人はみな寝てしまい、このあこぎが言っても、決して

て渡してくれまい。このことで（あなた様の女君への）4 **愛情**があるかどうか、見えはじめなさるでしょう」と言うと、典薬は笑って、「そうだな。残りの年（＝余命）が少ないとは言え、5 **もしひたすら（女君が私を）頼りにしてください**ならば、きつといたしましょう。岩山でも（動かすのもいとわない）と思っっているのだから、まして焼石などたやすいことだ。（私の女君への）思いで焼いてみせよう」と言うと、「同じことならば早く（焼いて持ってきてください）」と（あこぎに）せかされては、（典薬は）断れただろうか（いや、断れない）。（典薬は）これやって女君と）親しくなるのならば、たやすいことだ。（自分の）愛情・誠意を示そうと思っ、石を探してこようと立ち去った。

### まとめ

- ・ 文脈から語の意味・用法を識別する
- ・ 助詞・助動詞・敬語といった細部にも注意する
- ・ 人物の行動や発言を押さえる
- ・ 前後の展開も踏まえる
- ・ 人物の行動や発言から心情を押さえる